

作曲少女

《番外編》

生成AIと作曲家

仰木日向



2025.9 ヤマハ特設ページ掲載

「……終わった。何もかも」

自室のパソコンの前で私こと普通女子高生・山波いろはは、これまでに感じたことがないような絶望感と虚無感にさいなまれている。

「嘘でしょ……こんなことあっちゃダメだよ……なんで……」

——そう。AI作曲。世間で話題になってる例のやつ。なにかと耳にするから、私もちょっとした興味で触ってみたんだ。たぶん難しくてどうせ私には扱えないだろうなあとか思ってたんだけど……。

「……たった数秒で……曲が……出来ちゃった……」

……『クリスマス』、『バラード』、『ちよつと切ない』、そういう単語を入力するだけで生成されたAIの新曲は、今日まで私が積み上げてきた作曲力なんて軽々と上回ってしまう、もはや売り物みたいなクオリティの曲だった。

……え、終わりじゃない?? マジで終わったんだけど、どうしようこれ??

椅子の背もたれに体重をかけて、天井を見上げる。いままで作曲のことで色んな挫折を味わってきたけど、今回のコレはその比じゃない。作曲をする理由そのものを根こそぎ奪ってくるヤバ過ぎる発明だ。こんなことが出来てしまうなんて、いつそ知らない方が幸せだったとすら思う。

*く*く*く*く*く*

「———つていうことが昨日あったんだけど。珠ちゃんどう思う？」

「うん。まあ気にせず作曲すりゃいいんじゃない？」

「……………」

作曲部（と見せかけて作曲同好会）の朝練と称しつつ、ただ早めに教室に来て二人でいるっただけの私と珠ちゃん。窓の外では活発な運動部の朝練の掛け声や、吹奏楽部の楽器の音がまばらに聞こえている。

「……気にせずにつて、そんなの無理だよ……終わらだよ……私が作曲をする意味なんて、もうなくなっちゃったんだよ……」

「なんで？」

「いや、だって、作曲なんかしなくても一瞬で良い曲作れちゃうんだよ？」

「いままでとあんま変わんないと思うけどなあ」

「変わるって！　なんでそんな平気そうなの？　これは珠ちゃんにとっても無視出来ない問題なんだよ！？」

「そうかな？」

「そうだよ！　だってほら、作曲の仕事だってAIに取られちゃうかもしれないんだよ！？」

珠ちゃんは、ものすごくどうでもよさそうにしながらカロリーフレンドを食べつつ、豆乳を飲んでいる。目元はなんとなく眠そうだけど、どうやら作曲の仕事で昨日はあんまり寝てないらしかった。

「まーそんなときやそんなときじゃない？」

「なんでそんなテンションなの……？　これは作曲業界全体の一大事なんだよ珠ちゃん！」

「残念ながらどうでもいい！　すまんな！！」

「えええ！？」

珠ちゃんはちよつと不機嫌というか、しつこいぞつて感じの目でカロリーフレンドを咀嚼しつつ、豆乳でグイッと飲み込む。そして、ふうと一息ついて言った。

「AIがどんなに進歩しても、あたしが曲を書く楽しさはなくならないだろ」
「……？」

ん？ いや、ん？？

「そ、そういう話じゃなくて……」

「じゃあどういいう話なんだよ」

「……」

どういいう……って言われると、なんて言えば……。

「えつと……だつてさ、自分が書かなくてもあんなにすごい曲が作れちゃうんだから、もう私が曲を——」

「——そこが意味わからんって言ってるんだ。じゃあ、世の中には美味しい冷凍食品が山ほどあるけど、いろはが料理をする意味はないし、楽しさもないってことか？」

「そ、それは、ちよつと別の話じゃない？」

「同じだろ」

「そうかな……」

珠ちゃんは眉を曲げて、どうしたものかと言ったような表情で一瞬考えてから言う。

「まあ、いろはが言いたいのそこじゃないんだろうな多分。でも、早い段階でその勘違いに気づいた方が良くもしれない」

「どういうこと？ 勘違い？」

「AIが創作の喜びを奪うっていう、勘違いだ」

「勘違いなのか。実際、私の喜びはそのままに奪われそうなんだけど……？」

「作曲に限らず、創作はそもそも『作っている最中が一番熱い』んだ。上手に出来た完成品を眺めて満足してる時間もちろん楽しいけど、そっちはどちらかというとオマケだ。そして、その完成品に他人があれこれと評価をつける様子なんてオマケの中のさらにオマケだ。まず、この大前提をよく覚えておいてくれ」

「……」

言ってることの意味は、ちよつとわかる。けど、うーん……。

「そ、そうかな？ 評価も大事だと思うけど……」

「まあ、要らないとは言わないよ。オマケとはいえ楽しさの一つだからな。ただ、だとしても生成AIじゃ意味ないだろ」

「意味ないかな？」

「自分で一生懸命作った料理を褒められるのと、冷凍食品を解凍しただけの料理を褒められるのとじゃ、話が全然違う。自分要素のないものを褒められたとして、なんか嬉しいのか？」
「う……」

「……………どうだろ。ぶっちゃけどうだろ。そのへん。
どうなんだろう。」

「でも……自分で一生懸命作った料理がマズいって言われたらショックだし……たぶん耐えられないし……美味しいとか、すごいとか、そんな風に褒めてもらえるなら……冷凍食品でも、ちよつと嬉しいかも……しれない」

私は、珠ちゃんの目を見れずに、おそろおそろ言う。……実際さ、本音で言うところじゃない？ 傷つかずに褒めてもらえるなら、それはやっぱり魅力的だよ……。

「ふーむ、そうか」

「あの……あ、や、やつぱり、珠ちゃんが正しい……かも……ごめん」

なんだか、言っちゃいけないこと言った気がする。余計なこと言っちゃった。どうしょ。呆

れられたかも。

「いや、本音で思ったなら謝ることなんてないよ。そこはたぶん、この問題のコアの部分なんだろうな」

「え、そうかな」

珠ちゃんは真面目な顔で、口に手を当てて考える。

「自分なりに精一杯考えて料理を作っても、冷凍食品……つまりAIがそれを一瞬で越えてくる。いろはにはいま、そういう感じに見えてるってことか」

「あ、近い。それだীব近いと思う」

「で、だったらもう冷食でいいじゃん、と思っちゃったりすると」

「……まあ、若干……そんな気分かも」

「なるほどな。これは思いのほか、デリケートな話だ」

「デリケート？」

「曲を作るのが好きなのか、褒められるのが好きなのか。どっちの方が上だ？」

「うお……」

なんかヤバイ二択きた！

「……どつちもなんだけど……」

「あえて片方を選ぶとしたらだ」

「曲を作る方……だと思いたい」

「そうか。なら、曲を作る楽しさにもっと集中すればいいじゃんか」

「でも、褒め言葉も欲しい……」

「あはは、まあ、それも本音なんだろうけど、曲を作る楽しさを放棄したら作曲家じゃなくなつちやうだろ？」

「それは……そう」

「どんなすごいテクノロジーが現れても、作曲家は曲を作るし、画家は絵を描くし、小説家は物語を綴るよ。だって、作ってるのが楽しいんだから。一瞬で山を登れるすごい乗り物があったとして、そんな方法で登山して楽しいか？ 周りは登頂したことを褒めるかもしれないけど、まともに登山してるこつちからしてみれば滑稽にしか見えないだろ？」

「たしかに」

「作る楽しさが創作のメインディッシュだ。それを見失わなければ、特に騒ぐようなことじゃないよ」

……ああ、まさに珠ちゃんだ。

でも、プロとかになるとそうとも言えないんじゃないかな……？

「でも、じゃあ珠ちゃん、もしAIがさらに進化して、珠ちゃんに頼まなくてもハイクオリティな音楽が作れちゃう時代が来たら？ 珠ちゃんっぽい曲を作れるAIが現れたら？ 珠ちゃんは作曲家を続けられないんじゃない……？」

「あたしが明日作る曲を、AIは作れるのか？」

「え？」

「『作曲家・珠美のさらに進化した次の曲』が作れるのは、この世であたしだけだ。あたしはあたしという作家レースの中で常にトップランナーだし、どんな偽物が現れたとしてもあたしを越えることは絶対にありえない。それが作家だ」

「……お、おお」

なんとという力強いコメント……いや、意味はわかるけど、あまりにも強者過ぎてなんと云つたらいいか……。

「仮に、あたしの作風をパクったAIが登場したとしてだ。その偽物AIに仕事を任せるような企業はそもそもあたしの方から願い下げだ。あたしがいままで作ったものを気に入ってくれて、明日作るものに一緒にワクワクしてくれる、そういう仲間とあたしは一緒に仕事する。それだけだろ。むしろ、変な企業とまともな企業を見分けるポイントになるくらいだ」

「……なるほど。たしかに」

「あたしがAIに対して否定的行動を取るとすれば、それは『あたしが作ってないものまであたしが作ったことになってる』責任が発生する」とかそういうケースだ。あたしや関係者に迷惑かかるパターンね。それについては、それこそ実害が出るものだし法的に対処するよ」

「……うーむ……そうだね……」

珠ちゃんの意見は、さすが筋が通ってる。なんか、私が変なこと言ってたのかなって気がしてきた。私が勝手に騒いでただけ……なのかな？ いや、そうでもない気がするんだけど……。

「珠ちゃんの言うことは、うん、その通りだと思うんだけど……なんかSNSとか見てたら、音楽業界に深刻な影響が、みたいな話って結構あるじゃない？ そんなに簡単なことじゃないんじゃないかなこれ……？」

私の言葉に、珠ちゃんは一瞬止まる。そして、ちよつと床を見て視線を動かさず、静かなトーンで言う。

「……まあ、これはちよつと言葉を選ぶべきことだけど」

「うん」

「生成AIの登場に焦ってるのは『他人の真似しかしてこなかった人』だ。実際、プロの世界

にもそういう人は少なくない。その人達にとって生成AIは自分達の絶望的な上位互換であり、生存戦略を奪う、速度も品質も桁違いの、まさに最悪の天敵だ」

「……そうかもね」

「いろはみたいな作曲初心者にとっては『やる気を削ぐ目の毒』で、真似だけで生きてきた人からすると死活問題、これがAIに憂う人の主な心境なんだろう。でもな、あたしはこの生成AI時代の到来をそれほど悲観してないんだ」

「なんで？ 天才だから？」

「そうじゃない。これは、むしろみんなにとってプラスになる状況なんじゃないかって思ってるんだよ」

「なにがどうしてそんな結論になるの？」

「これから先の時代『模倣の価値』が下がっていくからだ」

「模倣の価値が下がる……？ あっ」

模倣……つまりマネの価値が下がる。そうなってくると……。

「そう。そういうことなんだ。生成AIとはつまり、模倣するツールだ。模倣だけで生きてきたクリエイターは、これから先数年ではほぼ絶滅することになると思う。それについては気の毒だけど、そういう人も、これから始める入門者も、強制的に『自分らしさ』と向き合うことになるんだよ」

「そ……そうなる……かも……？」

「考えようによつてはプラスつてのはそこだ。模倣で手に入る見せかけの賞賛にハマることなく、早い段階で『自分らしさ』という領域に進むことが出来る。ある意味ではより明確に『クリエイターの道』がクッキリと見えやすくなるのが、これからの時代なんだとあたしは思うよ」

「そういうことになる……かな？」

「いろは、いまお前に必要なのは、『誰にも見向きされないかもしれない、でも自分が好きだ』と思う道に進む勇気』だ。元祖……オリジナルと呼ばれる作家はおしなべて、初めは模倣から入ったとしてもいつかこの道に入つて、ずっと歩いて、歩き続けて自分という作風のトップランナーになっていく。プロとかアマとか関係ない。いろはが作曲をして、楽しいと思う、そして、もつとこういう風にしたいと工夫を重ねる、それを続けた先にあるのが、いろはが最も欲しがっていた『山波いろはさんの作風すごい好きです』とかつて言葉なんだ」

「……そうなのかな」

珠ちゃんの語りは、あいかわらず一般女子高生の私にはあまりにも高度だなとは思ふ。けど、それはガチだよ。そう簡単なことじゃないけど、合つてると思う。つていうか、それが出来る人達だからこそ、私達はクリエイターに憧れたりするんだろうね。

「納得した？ まだなんか気になる？」

「ううん。納得した。かなり珠ちゃんの言う通りだと思う」

「そうか。そりゃよかった」

「ねえ珠ちゃん、それを踏まえてなんだけどさ」

「なんだ？」

私は、ニツコリと笑ってから言う。

「……それは正しいかもしれないけど！ やっぱり、いますぐいっぱい褒められたい！」

「ああ……っ！ ふんばれ！ ふんばれいろは！ 最初は誰にも注目されないという砂漠を頑張って歩くんだ！ そして曲を書くことそのものを味わえ！」

「いやだああ！ 生成AIで一瞬で曲作って、死ぬほどみんなに褒められたあい！！」
「あぶない！ そっちは地獄だぞ！ いろはーツツツ！！」

床でのたうつ私と、それを見て笑う珠ちゃん。……まあ、結局そういうトコなんだろうなとは思いつつ。人間（つていうか私）つてズボラだね。『自分らしさに向き合う時代』かあ。よく聞く言葉ではあるけど、やっぱりものすごく怖いし、難しいよね。私、そういうの出来るのかな。

今日はここまでっ！